

平成 25 年 8 月 5 日

## 「生徒指導支援資料4 いじめと向き合う」について

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターでは、学校現場においていじめ問題に取り組んでいる学校関係者向けに、いじめ防止の取組推進に資する標記資料を作成しました。

### 1. 概要

当センターは平成 21 年度から「生徒指導支援資料 いじめを理解する」、「生徒指導支援資料 2 いじめを予防する」、「生徒指導支援資料 3 いじめを減らす」を作成してきましたが、今回それらに続き、「生徒指導支援資料 4 いじめと向き合う」を作成しました。

本資料は、まず全教職員がいじめについてきちんと理解し、その上で全ての児童生徒を対象とした正しい取組を行うことにより、深刻ないじめをなくすことを目的としており、『いじめ追跡調査 2010-2012』と『いじめについて、正しく知り、正しく考え、正しく行動する』の 2 点から構成されています。

### 2. 構成

#### (1) 『いじめ追跡調査 2010-2012』

いじめの実態を定点観測的に調べた結果を 3 年ごとにまとめている報告書の最新版で、2004 年度以降の日本のいじめの実態について、欧米の調査研究とも比較できる形でとり続けてきたデータを分析し、いじめに関する言説の真偽を検証しています。

#### (2) 『いじめについて、正しく知り、正しく考え、正しく行動する』

学校現場でいじめ問題に取り組んでいる関係者向けに、『いじめ追跡調査 2010-2012』を中心に本研究所のいじめに関する研究成果のポイントをわかりやすく解説した資料です。

### 3. 主な内容（詳細は別紙参照）

- ・いじめにピークがあるという考え方は誤りである
- ・いじめは特定のいじめられっ子やいじめっ子の問題ではなく、どの子どもにも起こりうる
- ・「暴力を伴わないいじめ」と「暴力や暴力を伴ういじめ」とをきちんと分けるべきである
- ・暴力を伴わないいじめは、全ての児童生徒を対象とした未然防止が最も有効である
- ・暴力を伴ういじめは、気付いた時点での早期対応が何よりも求められる
- ・いじめの未然防止のためには、絆づくりと居場所づくりが重要である

### 4. 学校、教育委員会等への配布について

8 月末に、各都道府県・政令指定都市教育委員会、市区町村教育委員会、国公私立小学校・中学校・高等学校・中等教育学校に配布し、併せて、国立教育政策研究所のホームページに掲載します。（研究所ホームページ URL <http://www.nier.go.jp/>）

#### 【お問合せ】国立教育政策研究所

生徒指導・進路指導研究センター総括研究官	滝 充	電話：03-6733-6885
生徒指導・進路指導研究センター企画課長	人見 達也	電話：03-6733-6879
生徒指導・進路指導研究センター企画係長	深澤 国広	電話：03-6733-6880
[広報担当] 企画普及室普及・国際係長	飯塚 昭義	電話：03-6733-6812

## 「生徒指導支援資料4 いじめと向き合う」

### (1) 『いじめ追跡調査 2010-2012』

#### 調査の概要 (P 3)

- ・調査対象：大都市近郊の地方都市の全小中学校の児童生徒全員  
(小学校4年生以上、1学年7~800人)
- ・2010~2012年の3年間(6回分)のデータを中心に、必要に応じて2004年以降のデータを分析。
- ・本調査の特長：いじめの実態の数量的変化を経年的に追えること。また、個々の児童生徒におけるいじめの実態も追うことができる。

#### 内容

##### ○いじめのピーク・社会問題化 (P 5)

- ・いじめに流行とかピークがあるという考え方は誤りである。 →図1-1、1-2 (P 5)
- ・いじめの社会問題化は、件数の増減とは関係なく、自殺案件に対する学校や教育委員会の対応姿勢を問題視する世論によってもたらされる。

##### ○いじめの発生実態 (P 6~10)

- ・1996年1月の文部大臣の緊急アピールでは、「深刻ないじめは、どの学校にも、どのクラスにも、どの子供にも起こりうる」と明言している。このアピールのとおり、いじめは特定のいじめられっ子(いじめられやすい子供)やいじめっ子(いじめやすい子供)の問題ではない。
- ・中学生の3年間6回を追跡すると、「仲間はずれ・無視・陰口」の経験率において、6回とも週1回以上の被害経験を訴えた生徒はわずか1名(全体の0.14%)であり、6回とも被害経験がぜんぜんなかったと答えた生徒も205名(全体の28.7%)にとどまる。  
→図2 (P 6)
- ・また、小学校4年生からの6年間12回を見ると、被害経験では12回とも週に1回以上の被害が継続した者は0名である。加害経験でも、11回以上にわたって継続した者は0名で、12回とも経験がなかった者は80名(12.7%)である。 →図5 (P 8)
- ・さらに、6年間12回の調査のうち6回以上の経験者を常習的と見なす場合、被害経験では4割強、加害経験でも4割弱が該当しており、予想を大きく上回る児童生徒が被害者としても加害者としても関わっている。 →図8 (P 10)
- ・一部の特定の児童生徒だけがいじめに巻き込まれているわけでない。ほとんどの児童生徒が被害者にはもちろん加害者になっても不思議ではなく、被害者も加害者も大きく入れ替わりながらいじめが進行するという実態は、大きくは変わっていないと言える。

- ・したがって、一部の特別な児童生徒に注意を払う、一部の問題を抱えた児童生徒を早い段階で見つけ出す等の取組は、必ずしも期待される効果を持ち得ないと予想される。

#### ○暴力を伴ういじめ（P 11～13）

- ・暴力を伴ういじめが、大きく増えているといった実態は確認できない。  
→図9-1、9-2（P 11）
- ・暴力を伴ういじめは、暴力を伴わないいじめと比べて目に見えやすいため、発見しやすい。
- ・暴力を伴ういじめは、被害、加害のどちらについても、ごく一部の者は何度も繰り返し経験しているのに対し、多くは数回程度の経験者というのが実態であり、加害生徒はある程度限られてくる。 →図12（P 13）

#### ○いじめのタイプの重なりと対応（P 14）

- ・暴力を伴ういじめを行う児童生徒は、暴力を伴わないいじめも行う。 →図13（P 14）
- ・暴力を伴ういじめは目に見えやすいので、気づいた時点で速やかに対応する早期対応が何よりも求められる。一方、暴力を伴わないいじめは、すべての児童生徒を対象とした未然防止が最も有効である。

### （2）『いじめについて、正しく知り、正しく考え、正しく行動する。』

#### 概要

『いじめ追跡調査 2010-2012』を中心に、いじめに関する研究成果を、より分かりやすいインタビュー形式で提供。

#### 内容

- 『いじめ追跡調査 2010-2012』報告書について（P 4～5）
  - ・2004年度以降の日本のいじめの実態について、欧米の調査研究とも比較できる形でデータをとり続けてきた結果をまとめた報告書である。
- 2012年夏の社会問題化—いじめと暴力—（P 6～7）
  - ・昨夏の社会問題化以来、いじめの概念や議論がすっかり混乱している。いじめと暴力をきちんと区別しないまま、即効的な解決策を求めたり、本来のいじめ対応やいじめ対策がおろそかになりかねない状況が生まれている。
  - ・暴力といじめを一緒に考えると、目に見えやすい暴力行為に目が奪われ、暴力を伴ういじめこそが深刻ないじめの代表であるかのようなイメージが人々に刷り込まれてしまう懸念がある。その結果、暴力を伴わない目に見えにくいいじめを見過ごしやすくなるので、「暴力を伴わないいじめ」と「暴力や暴力を伴ういじめ」とをきちんと分けるべきである。

○「暴力を伴ういじめ」の特徴（P 8～9）

- ・ 暴力を伴ういじめは、暴力を伴わないいじめと異なり、どの子供も加害者になるとは言えず、被害者もさほど大きく広がることはなく限定的である。また、暴力を伴ういじめは、人目につきやすいので発覚しやすく、ケガをしたりすれば、教師が気付かないはずはない。
- ・ 加害者だけでなく被害者も被害を否定することが少なくないが、その理由としてグループを抜けるともっとひどい目に遭うという場合と友達がいなくなるという場合がある。したがって、暴力に気付いたら、まずは速やかに止めに入るべきであり、被害者が被害を否定しても、鵜呑みにしてはいけない。

○「暴力を伴わないいじめ」の特徴（P 10～11）

- ・ 暴力を伴わないいじめは目に見えにくく、教職員が100%気付くことは不可能である。また、加害側に行方を正当化する言い訳があるのが普通であり、単純には説得できない。
- ・ このため、暴力を伴わないいじめについては、起きてからの対応ではなく起きないようにする対策、つまり早期発見ではなく未然防止が重要である。

○「未然防止」の進め方（P 12～13）

- ・ 未然防止を進める際は、絆づくりと居場所づくりの両方を行っていくことが重要である。
- ・ 居場所づくりは、学級や学年、学校を児童生徒が安心・安全に学校生活を送ることができると感じられる場にすることである。
- ・ 絆づくりは、子供自らが一緒に活動することを通じて、互いのことを認め合ったり、心のつながりを感じたりすることであり、あくまで子供同士が行うことが重要である。
- ・ いじめを減らすためには、授業づくりと集団づくりを見直していくこと、言い換えれば、規律・学力・自己有用感が必要になる。